

皇位繼承の歴史（一）「承和の變」

高田 友

平安京に奠都し給へる50桓武天皇の三皇子、次第を繼ぎて祖宗の神器を承け給ふ。51平城天皇（安殿親王／即位八〇六）、52嵯峨天皇（神野親王／八〇九）、53淳和天皇（大伴親王／八二三）、是なり。

平城帝と嵯峨帝は同母の兄弟、兄、政事に倦み給ふや、すなはち弟に讓位せんと欲たまふ。嵯峨帝は後に強き御爲人と變じたまへれども、當初は氣弱なる親王におはしまし、登極の任に任へずとて泣きて拒みたまふも、御兄許したまはず、不得已、惟神の寶祚を踐みたまふ。皇太子に立ちたまへるは平城皇子高岳親王（十一歳）、八〇九年の儀なりき。

然而、翌八一〇年、藥子の亂出來す。平城上皇、奈良に都を戻さんと畫策したまひ、寵姬藥子と其の兄仲成を談ひて、上洛を圖らひたまふも、坂上田村麻呂の軍勢に阻まれて落飾に及び給ふ。藥子は自害、仲成は成敗せらる。上皇は奈良に幽閉せらるること十五年、つひに崩御あらせたまふ。

皇太子高岳親王、御父上皇の罪に連坐して廢太子とならせたまひ、後に弘法大師空海の弟子となりて出家したまふ。六十路を越えてより入唐を志し、長安に至りたるも、なほ天竺へ赴かんとして、羅越國（シンガポールもしくはその對岸）にて薨去したまふとの由。

さて、嵯峨天皇は艶福にておはしまし、皇子皇女を數ふること五十に垂々とす。皇后は橘嘉智子、後に檀林皇后と唱へらる。

世に「本朝三美人」と讚へらるるは上代の衣通姬、奈良の光明皇后、攝關期の道綱母なれど、光明皇后は生前の記録には美女なりとの記述なし。混同ありて、さは檀林皇后の儀にあらずやとの説有力なり。才色兼備の譽高き貴人にてぞおはします。七人の皇子皇女を成したまへれど、内に正良親王（54仁明天皇）と正子内親王あり。

高岳親王廢せられて後、太子に選ばれたるは嵯峨帝の同年出生の異母弟大伴親王。嵯峨帝十年治天下の後、即位あらせたまふ。（平安初期には未だ踐祚と即位の別なかりき）

淳和天皇登極あらせらるるや（八二三）、皇太子には正良親王（仁明）立たせたまふ。

嵯峨・淳和いづれも在位半ばにて退位あらせたまふ。而して、平城上皇の崩御せられたるは淳和即位の翌年なれば、これが一年の程は天朝の財政「一天皇二上皇の負擔に耐へず」と嘆かれたり。

八四〇年、54仁明天皇天位を繼ぎたまふ。嵯峨、淳和いづれもいまだ在世せられたまふ。皇太子に立てられたるは淳和皇子恒貞親王なりき。

さて、仁明天皇に皇子あり、道康親王とぞ申し上ぐる。生母は藤原順子（冬嗣女・良房妹）。すなはち親王は嵯峨天皇の内孫にて、かつ冬嗣の外孫なり。

良房、我が甥を登極せしめ奉らんとて野望を逞しうす。已而、嵯峨帝、皇太子恒貞を寵愛することひと片ならねど、「上皇（嵯峨）百年の後は、恒貞の命運盡くべし」との世評かまびすし。

何を以て嵯峨帝の我が孫よりも異母弟の子・恒貞を寵愛したまへると訝りたまふなかれ。すでに申せし如く、仁明天皇の妹に正子あり（嵯峨皇女）。同母妹にして檀林皇后の所生なり。而して、正子は叔父・淳和天皇の皇后（二十四歳差）となりて、恒貞親王を生みたまふ。複雑怪奇なる系圖なれど察したまひけりや。恒貞は嵯峨・檀林の外孫なり。

内孫と外孫といづれかはゆきは軽々に論じがたし。然れども、恒貞は容姿優麗にして學に秀でたるによりて、外祖父嵯峨帝はこれを凡庸なる道康よりも重んじたり。

然しかりしかうして而、檀林皇后は藤原良房に籠絡せらるるの儀あり、道康をして立太子せしめんと畫策したまふ。蓋し、皇家の行く末は良房に恃むの外なし。これが係累を大統に即かしむるに如かずと思召したるなり。

果して、八四二年、承和じやわの變出來しゆたいす。冬房と檀林皇后の陰謀着々と進展し、恒貞親王の廢太子は目前に迫りたりと豫測せられたり。而して、をりしも嵯峨兩御あり。於是乎ここにわいてか、皇太子に近侍する橘逸勢外ほか、先んずれば敵を制すとて、主上を降し奉りて、恒貞を即位せしめ奉らんと企てたり。冤罪にはあらざるがごとくなれど、恒貞は加擔せざりしとの由。

これを讒訴したるは平城天皇第一皇子・阿保親王あほ。高岳親王の異母兄にして、在原行平・業平の父たり。但、保身の爲に讒訴したるにはあらで、恒貞の上を思ひて、穩便に收拾を圖らんと欲したるがゆゑなりけん。事件の後、久しからずして夢去せるは、思ひがけなき大事となり、信義に悖りたるを恥ぢて自裁したるにあらざりと推察せらる。

關係者悉く處罰せられ、就中三筆の一なる逸勢（檀林皇后從弟）は拷問せられたるの傷に據りて伊豆國に配せられて後に死ぬるの悲哀を味はひたり。恒貞は廢せられたり。このとき、恒貞十八歳、道康は十六歳たりき。

その後の恒貞の處世は如何なりしと思ひたまふや。豈圖らん、出家して、未だ本朝にありし高岳親王（眞如／從兄）の弟子となり、これに劣らぬ名僧と讃へらるるに至る。

哀れを留めたりしが恒貞の母・正子内親王。御母・檀林皇后に似たりし才色兼備みやびの雅やかなる女性によしやうにておはしまし、母に鍾愛せらるること無上なりき。而して今、母に裏切られ、我が息すなはち兄の子のライバルとなつて、人の世の嘆きを見て竟なほんぬ。廢太子のをりにには、泣きて母を恨みたりとぞ記録せらるる。

さらに悲しき宿世は、仁明帝と正子内親王、同年の生れなるの儀なり。同母の兄妹にして同年の生れなれば、おそらくは雙子なりしとこそ察せらるれ。嵯峨と淳和は同年の生れ、仁明と正子も同年の生れ。寔に不思議なる因縁、この美しき雙子の妹を若き日の仁明は愛憎あいじやくお措く所なかりきと傳へらるるに、濁世ぢよくせの汚れたる定めにより、權柄を我が手に握らんと争あひて仇となる。

正子は我が子の跡を追ひて落飾し、佛道三昧に世を送り、大覺寺建立の祖となりしとかや。

（平成三十年四月一日受附）